

幻想白兎記

しやりなり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

永遠亭で暮らす「イナバ」の1匹であり、永琳の葉の効果でそれなりの知能とそれなりの力を手に入れた白餅子つくも。そんな彼女から見た幻想郷の日常の物語。

目次

01	：白 餅子と申します。	1
02	：紅魔館へ行こう	6
03	：危険な妹サマ	13
04	：餅子と輝夜	19
05	：魔法の森と白黒のアイツ	27
06	：魔理沙のマジックアイテム	34
07	：黒いキノコと黒い魔女	39
08	：闇夜の手	47
09	：依頼はプロに	54

01：白 餅子と申します。

初めまして。私、白つくも餅子もちこと申します。私は迷いの竹林の奥、永遠亭で暮らしています。永遠亭では私たちウサギは「イナバ」と呼ばれています。基本的の名前がある子は少なく、そもそも人の言葉を喋るウサギ自体が希少で、殆どがそれを理解できません。恥ずかしながら以前も私は全くわかりませんでした。

先日、何匹かのウサギで永琳様の薬庫に忍び込んだ際、出来心で薬を飲んだそれは『知能や強さを10倍程度にする薬』だったらしく、人の言葉を理解することが出来るようになりました。まあ、そもそも知能が低かったので10倍と言っても、「普通の人よりちよつと頭が良い」程度に落ち着きました。強さに関しては、異変の際に博麗の巫女に瞬殺されるほどに弱かったのですが、幻想郷の中でも弱い方程度（メタ的に言えば中ボスくらいですね）には強くなれました。

どうやら知能に比例して好奇心や知識欲もかなり高まってしまったようで、以前は竹林の中だけで満足していたのですが最近は少し遠くに行ったりする事が増えてきました。そんな私の物語です。

* * * * *

「餅子ー！餅子ー！」

私の名前を呼ぶ声がある。この声はおそらく永琳様だ。永琳様が私の名前を呼ぶことはかなり珍しい。ついこの間までイナバと呼ばれていたが餅子という名前を最近覚えてもらった。

それは置いといて永琳様が私を呼んでいますが、正直あまり返事をしたくない。何故ならば、彼女が私を呼ぶときは大抵めんどくさい事か、薬の実験台にされるかだからだ。……まあ、彼女には永遠亭に住まわせてもらってる立場ですし、ましてや貴重な薬を飲んでしまった身。逆らう事なんて出来ないのだけど……

「はい、何でしょうか永琳様」

「鈴仙が薬の副作用でダウンしちゃってね、彼女の代わりに薬の配達を頼まれて欲しいの。」

ホツとした。かなりめんどくさいですが、新薬の実験体に使われるよりはるかにマシですね。

私は鈴仙がいつも使っている木箱を背負って支度をした。そこそこ身長の高い鈴仙と比べ、私はかなり背が低い（140cm）ので背負うのに苦労する。

やっそこさ支度を終え、私は永遠亭を出発した。人里を目指してふよふよ空を飛んで移動していると、妖精たちが悪戯として弾幕を張ってくる。それはいつもの事で、適当

に撃ち返して妖精を落としていく。

暇つぶしがてらに妖精を落としていると、前方から猛スピードでこちらに接近してくるのが見えた。その者はこちらに気付いた様で、焦っている。

「うわああああ！どけどけどけ！どけどけ！」

「えっ、うわっ、ちょよ！」

ギリギリのところで突撃をかわした。通り過ぎた者もブレーキをかけて急停止する。まったく……あんな猛スピードで前を見ないアホはどこのだいつなんですかね……と思つてそちらの方を見ると、そこに居たのは白黒の帽子に服、綺麗な金髪で箒にまたがった少女、その名も

(き、霧雨魔理沙……！)

まずい……この少女のことは知っている。傍若無人で人が目につく度にその者から何かを強奪していく(主に本やマジックアイテム)悪魔……と、てゐがニヤニヤしながら言っていた。

「いやー、すまんすまん。こんな良い天気だといふスピードあがつちゃうな。……ん、お前は永遠亭のウサギか。なんだか他のウサギと比べて結構強そうな風を感じるな。よし、ここは一発弾幕ごっこ……」

「え、遠慮します！急いでるんで！」

弾幕勝負はかなり強いと聞いている。そして負けた者は身ぐるみを剥がされてしま
うとも！私にも弾幕ごっここの心得はあるが、始めたのもここ数週間の事なので絶対に勝
てないだろう。弾幕ごっこ自体は嫌いじゃないし、普通にそれをやる分には喜んでやる
だろう。しかし、今は永琳様からのお使いで大事な薬を持っているのと、相手が相手な
ので逃げるしかない。

私は全速力で人里へ逃げた。咄嗟のことで少女は反応できずにこちらをボーッと見
ている。

「ふっ、私はそんなに逃げられたらよ…」

少女は箒を握る手にグツと力をいれた。

「逆に追いかけたくなるんだぜええええ！」

「ぎゃあああああ！」

お、追いかけてきた！やはり身ぐるみを剥がす気なんだろう。命までは取られなかつ
たとして、薬を取られた事を永琳様が知れば…ああ、恐ろしい…

全速力で飛行するも、霧雨魔理沙の方はどんどん加速してくる。チラリと後方を確認
すると、もうすぐそこに来ていた。

「うわああああ!!」

「捕まえたああああ!!」

ガシィ!と、首根っこを掴まれてしまった。

「はっはっは、この魔理沙さまから逃げ切ろうなんて100年早い」

「うう……観念しました……どうぞお剥ぎください」

私は抵抗することを諦め、服従のポーズをとった。

「剥ぐ? 何言ってるんだお前? 私はお前が逃げたから追っただけだ」

「え? 私の身ぐるみを剥がすのが目的ではないんですか?」

「はあ?なんで私がそんな事しなきゃいけないんだ?」

* * * * *

霧雨魔理沙に解放され、人里についた私はとりあえず人里に届ける薬の分の配達を終わらせた。永琳様に「これでお団子でも食べなさい」と、お金を頂いたので、団子屋で団子とお茶を嗜んでいる所である。

やはり、団子という物はよい。色々な味を楽しめるし、食べ応えも良く、腹持ちも良い。なんて素晴らしい食べ物なのだろう。私の名前は「餅子」なのだが、どうせなら「団子」に変えてしまおうか……と、くだらない事を考えていると、丁度良く次の配達先に住んでいる人物が通りかかった。

02 : 紅魔館へ行こう

お団子を頬張っている私の前に現れたのは確か……そうそう、十六夜咲夜、次の配達先である紅魔館のメイド長だ。私はお団子を食べ終え、彼女に話しかけようとすが……が、そもそもこちらは彼女のことを知っているが、向こうはこちらの事を知らない。なかなか話しかける事ができず、堂々と後ろをついて行くのもなかなか怪しい。なので、隠れながら話しかけるタイミングを狙い彼女についていくことにした。これはこれで尾行するような形になっているのだが。

彼女を尾行して暫く経ったが、一向に話しかけることができない。どうしよう。そう考えていると、私の前に一羽の小鳥が止まった。かわいいなあ……つて、今はそんな事をしている暇はない。もう一度十六夜咲夜の方を見た……が、そこには誰もいなかった。

「あ、あれ？どこに……」

「貴女だれ？」

「びびいびいびい!?!」

突如背後から突然話しかけられ、情けない声を出してしまった。バツと後ろを振り返

ると、銀色の髪、ミニスカートのメイド服の少女、十六夜咲夜が立っていた。

「で、ウサギがどうして私を尾行してたの？」

「あ、あの！私、永遠亭に住んでる白 餅子つていいいます！永琳様のお使いで紅魔館に菓の配達をしていて、そそそれで紅魔館のメイドである…その、十六夜咲夜さんが通りかかったので…えっと、その」

「菓…？ああ、パチュリー様ね」

「あ、そうです！それで、紅魔館に行った事無くて地図でしか知らないなので案内してもらえたらなあ…なんて、えへへ」

「ふうん…まあ、案内してあげる。貴女飛べるわよね？」

「あ、はい！でもそんなに早くないので出来ればゆっくり…」

「大丈夫、私もそんなに早いほうじゃないから」

咲夜さんはニコリと笑ってそう言った。気を遣ってくれたのかな？さつき見えないくらいの速さで私の後ろにまわってたし。ウサギながら耳がいい私でも、加速する時の音さえ聞こえなかったのだなら相当早いのだろう。

「あ、そうそう。貴女って弾幕ごっこはできる？」

「い、一応できます。初心者ですし、そんなに強くないですけど…」

「うーん、まあ、それなら大丈夫かもね」

「何かあるんですか?」

「私のご主人様に妹様がいらっしやるのだけど、その妹様がそういう時期でね、遊びたい盛りでウチの弱い妖精メイドにも弾幕ごっこを挑みまくって暴れてるのよ」

「そういう時期」って言い回しという事は幼いのかな?それにしても妹かあ…私にはそんな物いいないし、妹と戯れるなんてやってみたかったなあ。

その後、咲夜さんと談笑しつつ飛んでいると、紅魔館の前に着いた。紅魔館の前には人影があり、おそらく門番だろう。が、立つてはいるものの、門の横の塀に背中を預けてぐっすり寝ている。そしてどうやら寝言を言っているようだ。

「えへへえ……咲夜さあん……私の勝ちですよ……これからは…美鈴様って呼ぶように……えへへへ……」

次の瞬間、門番……えっと、美鈴さん(?)の頭にナイフが突き刺さった。

「ぎゃあああ!て、敵襲!」

美鈴さんは頭から血を流しながらビククリしてオロオロしている。なんでアレで死なないんだろう。そして、いつの間にか美鈴さんの後ろに移動していた咲夜さんが肩にポン、と手を置くと、ニコリとした。しかし目が笑っていない。

「美鈴、随分と良い夢を見てたようねえ」

「ささささ咲夜さん!」

「そうねえ……じゃあ、夢の中の私のリベンジでもしようかしら」

* * * * *

咲夜さんがリベンジ、もとい眠っていたことへの罰を終えて館内に入り、図書館の前に案内してもらったところだ。私は咲夜さんの怖い一面をみて、小さい体をさらに縮こませていた。

「私はここまでね。パチュリー様は奥の方にいらつしやると思うから、じゃ。」

「あ、ありがとうございます！」

咲夜さんはニコリと笑い、私の頭を撫でて別の方へと歩いて行った。怖いけど良い人だったな。そう思いながら私は図書館への大きな扉を開ける。

「あれ？どなたですか？」

中に入ると頭と背中にコウモリのような羽が生えている赤い髪の少女が話しかけてきた。

「永琳様に頼まれて薬の配達に来ました」

「ああ、成る程。では、パチュリー様の元へと案内いたしますね」

彼女がニコリと笑い、〃こちらへ〃と言って歩き出したので着いていく。図書館はとも広く、高く、大量の本が本棚に収められていた。一通り見回して前方を見ると、読書をしている少女が椅子に座っていた。薄ピンクの服装に、鈴仙に似た色をした髪の少

女。おそらく彼女が配達先のパチュリー・ノーレッジなのだろう。丁度彼女は本を読み終えた様で、パタリとそれを閉じた。そして立ち上がった時、こちらをチラリと見た。

「小悪魔、ケホ、そちらのウサギさんは？」

少し苦しそうに、かすれ気味の声で咳をしながらパチュリーさんが小悪魔さんに話しかけた。

「永遠亭から薬の配達にいらっしやったそうです」

「あら、いつもの、ケホ、ウサギとはちがうのね」

「はい、鈴仙は薬の実験でダウンしてしまってるので」

そう言つて私は背中箱から薬を取り出して彼女に渡した。彼女はすぐにその薬を専用の道具を使って吸引した。

「これよこれ。はあ、これでしばらくは忌々しい喉奥の枷から解放されるわ」

「パチュリー様だったら……こんな埃だらけの図書館に引きこもってるから喘息が治らないですよー」

「あら？その埃を貴女が全部取り除いてしまえばいいじゃない。貴女の怠慢よ」

「そ、そんな無茶苦茶な！」

さすが永琳様の薬といふべきだろう。先程まで喘息のせいで弱々しく喋っていたパチュリーだったが、ハキハキと喋っている

「まあ良いわ。それより小悪魔、これの書類をレミイに渡してきて」

「えー、今は妹様が暴れまわっていらっしやるのであんまりこの館内を移動したくないのですが……」

「大丈夫よ。ここ結構広いんだし、そんなすぐには出くわさな……」

突如として図書館の扉が爆発し、彼女が言い切る前にその言葉は遮られた。な、何が起きたのだろうか……モクモクと立ち込める煙の中から現れたのは金髪で赤い目をしており、背中から宝石の様な翼の生えた少女だった。

「い、妹様!!」

あ、あれが噂の妹様?! いや、想像してたのと違う!

「パ、パチュリー様! 妹様を止めてください……」

「むぎゆゑほっげほっ」

どうやら爆発した際に発生した大量の埃を吸い込んでしまった様で、その場にダウンしていた。

「むぎゆゑ……あ、あな……弾幕ごっこはでき……るわよ、ね……?」

「は、はい一応……」

「じゃあ……代わりに……フランの……相手をしてあげて……」

「わ、わかりました」

「ちなみに……彼女の能力は……”ありとあらゆるものを破壊する程度の能力”よ……」

そういうと彼女はガクツと力尽きてしまった。しかし、つい勢いで返事してしまった以上、やるしかない……。フランさんの”ありとあらゆるものを破壊する程度の能力”：かなり強力だ……。それに対する私の能力は……竹を司る程度の能力”。対抗できるのか……

いや無理でしょ。

03：危険な妹サマ

爆発音と共に扉を突き破って出てきた少女。彼女から感じる靈力はかなり強烈で、自分の想像していた可愛い妹様像は扉と共に消し飛んだ。そしてパチュリーさんは小悪魔さんに連れられてすでに避難したようだ。

そのパチュリーさんに聞いたところによると彼女の能力は「ありとあらゆるものを破壊する程度の能力」、それに対する私の能力は「竹を司る程度の能力」…。どう考えても無理だ。竹もろとも破壊されるのがオチだろう。

「ねえ、そこのおねーさん……いや、おねーさんでもないなあ……私と同じくらいの身長だ。やーい、チビ」

な、何だこの子は?! 同じくらいの子長……寧ろそっちの方が背が低いのにチビって煽ってきた!! “ありとあらゆるものを破壊する”にはプライドも含まれるのだろうか? 流石の私もムツとした。

「あは、怒ったみたいだ。おねーさんが弱そうだしさあ……この位しないと戦ってくれなさそうだもんね」

ぬぐぐ……：凶星を突かれるとこんなにも力つくとは！あはは、と笑う少女に対し、私

はほっぺを餅のように膨らませた。

「じゃー、始めようか！」

彼女がそう言い放ち、弾幕を張り始める。スペカを使つてないのにも関わらず、今まで一弾幕ごっこをやつた事のある相手（それほど多くないが）のスペカよりよっぽど手強い。まるで嵐のように弾幕が飛んできて避けるのがやつとだ。

「あは、おねーさん避けるの上手だね！さ・す・がが弱いか弱いウサギさん！捕食者に対する反応を思い出すがいい!!」

自分より（わずかだが）小さい子に圧倒され、煽られている。私自身も自らの能力を使い、反撃を試みることにした。私の「竹を司る程度の能力」は、決して本物の竹だけ操作するものではない。霊力でできた竹、「霊竹」を空中に生やして攻撃したりすることもできる。早速私はスペカを宣言する事にした。

「竹符「トラップバンブー」」

このスペルカードは、空中に光の線を描き、1秒前後経つとその軌跡を辿つて霊竹が生えるという技だ。時間が経てば経つ程にそのペースが上がっていく。

「これ……良いね。紅魔館（まじか）にいる奴や魔理沙とかにはないスペカ！」

……おしやべりしながら余裕でひよいひよいと避けられていく……！む、寧ろ楽しそうだ。そ、それなら次は……！

“大竹林「迷いの四方八方バレッジ」”

辺り一面に靈竹が生い茂り、フランさんを囲むように広い円を描く。私はそれに隠れ、靈竹自体から放たれる弾幕が対象に襲いかかる耐久スペルだ。私はそれに隠

しかし、これでも彼女にとつては全然物足りないらしい……全身を脱力したような体勢でひよいひよいと避けていく。流石に強すぎないこの子？それなら、まだいくつかスペルカードはあるけど……よし、とつておきのを……

「うーん、おねーさんまだまだだね。じゃ、私の本気^{マジ}スペカ見せたげる！いくよ」

“ QED 「495年の波紋」 ”

小さな弾幕が飛んできた。私はそれを難なく避けた次の瞬間、私の視界は弾幕に埋め尽くされた。その光景はまるで晴天の日に宵闇の空を見上げた時の如きだった。

“圧倒的”

その言葉が私の頭に浮かぶ。

* * * * *

「おねーさん弱かったね」

「ぐぬぬ……」

私の隣に座り、紅茶とお茶菓子を楽しんでるフランさんがつぶやく。それらを運んだ妖精メイドはフランの横でビクビクしている。

まあ、当然のごとく負けた。彼女の弾幕に被弾し、私の服（ブラウスとスカート）はボロボロではだけており、少々セクシーな姿になっている。

「フランさん強かったです」

「フランでいいよ。おねーさんが弱すぎるんだよ、初心者？」

「はい、最近始めたばかりです。フランちゃんは？」

「へえ、賢しいね。」

わざとちゃん付けして優位な位置に立とうとしてる。まあ、別にいいけど」

☒ かんぜんはいぼく
星

「フラン、おねーさんの事気に入ったし、名前で呼んでいい？……ってかおねーさんの名前何？」

「えっと、白 餅子です」

「餅子？あは、変な名前」

「むう……ちよつぱり気にしてることを！」

「ごめんごめん！えへ、餅子おねーちゃん！」

確かに凶暴で強敵、狂人だけど……まあ、可愛い。まるで本物の妹のようだ。弾幕ごっこではボロ負けしたけど、普通にしてる分には可愛いんじゃないかな？まあ、さっきの様子と比べてもこの子の知能や精神年齢はそこそ高そうだし、からかっているのはわか

るが。

「ご馳走さま！じゃ、私は自分の部屋に戻るね。」

彼女は椅子から降りて歩き出した。

「…ねえ、おねーちゃん」

ピタリと止まってこちらに話しかけてきた、振り返らずにそのまま。

「どうしたんですか？」

「…また、遊びに来てくれる？」

「！」

やっぱり、ちょっとと狂ってるだけで幼い女の子なのかもしれない。先ほどの小悪魔や、妖精メイド達の反応を見るにこの館の人達は彼女の事を恐れていて、それ故に孤独なのだろう。

圧倒的な力はその者を孤独にする。孤独になれば、その者はさらに力に縋り、溺れていくのだろう。でも、きつと手を差し伸べれば…これが独善的であつてもきつとそうするべきなんだ…私はそう思う。私はニコリと笑顔を彼女に向けた。

「もちろん！次は私の大好物のお団子を持っていきますー！」

私がそう言う、と彼女はこちらは振り返ってニコツと笑った。

「餅なのにお団子好きなんだ！変なのー！あははははは!!!おねえ被食者ちゃんまたねー！

!!!

「な、何だそのルビは————!!!」

彼女は笑いながら図書館を飛び出していき、図書館には誰もいなくなつた。薬の配達という目的は終えている為、私は薬箱を背負つて紅魔館を後にした。

外はいつのまにか橙色がかつてきており、日もだいぶ傾いている。私はふわりと体を浮かせ、紅魔館を背に迷いの竹林へと進み始めた。さあ帰ろう、永遠亭に。

04：餅子と輝夜

「ただいま帰りました〜」

紅魔館からまっすぐ永遠亭に帰り、扉を開けると輝夜様がいた。なぜか輝夜の服も私と同じ様にボロボロで泥だらけになっている。

「あら餅子…ってなにその格好!? 強姦でもされたの!？」

「違います…弾幕勝負で文字通りぼろ負けしました」

「あー、なるほど。あんた弱いもんね」

むう、相変わらずズバズバいうお姫様だなあこの人は…

「つていうか、輝夜様も大分ボロボロじゃないですか。…また妹紅さんと遊んできたんですか？」

「なんであんなのと遊ばなきゃなんなのよ! 喧嘩よ喧嘩。今日はギリギリ勝ったわ」

この人はいつも外に出かけては、自分と同じ蓬萊人の藤原妹紅さんと殺し合い（死なないけど）をしている。一度見物した事があるが、お互い死なないという事が分かっているのので手加減などしておらず、とてもグロテスクだった。

「今から風呂入るからあんたも入る? ってか背中流して、そして面白い話聞かせてよ」

相変わらずのわがままに私は深いため息をついた。

* * * * *

ちやぼん、という音と共に私は湯船に浸かった。ここ永遠亭には、てゐが落とし穴を作ろうとした時に、自らの能力の作用により掘り当てた温泉がある。まあ、とても小規模で湯船の大きさは3×5m程度だ。私はこのお風呂が好きで、暇な日は1日に3回ほど入っている。おそらく私のもち肌の原因はこれなのだろう。浴槽や外から見えないようにする為の仕切りは竹できており、私の能力で作ったものだ。

「はふう〜…いやされるう〜…」

「ぐああああ、し、しみるう………」

治りかけているものの、全身傷だらけの輝夜は、痛みに悶絶している…とても痛そうだ…

「ぐ、ぐぐう……ああ……うう……あ、治ってきた…」

「相変わらずすごい再生力ですね……うえ…傷が癒えていくのってかなりグロテスク…」

「人を見てグロテスクとか言わないでくれる？……それにしてもあんた……フツ、小さいいわね」

な、何を言い出したかと思えばこの姫様は……！

「そ、そうですかあ？あんまり変わらない様に思えますけど！寧ろ輝夜様の方がお姫様

らしくお淑やかで慎ましいかと思えます！」

「は、はあああ？ 私妹紅には勝ってるし！」

比べたの…？ 結構仲良いじゃないですか。

「まあ、良いわ。この小さいウサギ！ 私の背中を流しなさい！」

ぐぬぬ…小さいとは胸の事だけ言ってるのかなこの人は？

とりあえず背中を流す事にした。背中といっても、このぐうたらお姫様は全身を洗えと言っているのだ。私は永琳様を作ったシャンプーを手に出し、輝夜様の髪を洗い始める。因みに永琳様がこのシャンプーとリンスを作った際に幻想郷中で大ヒットし、飛ぶように売れてベストセラーとなった。幻想郷中かなり浸透し、今でもその儲けがあるらしい。

私は手を動かし、シャコシャコと音と泡を立てて輝夜様の髪を洗う。彼女は目を細め、気持ち良さそうに見える。

「あんた、うまいわね…他のイナバにもやらせたけど荒いのが多いのよねえ…」

「まあ、私達は本来水浴びで済ませちゃいますし、しょうがないです」

「まあ、確かにそうね。ところであんた誰に…あ、そこもつと強くガシガシして…誰にボロ負けしたの？」

「紅魔館の妹さんです」

「ああ、聞いたことあるわね…えっと…なんとかスカレット…まあ、良いわ。どうせ思
い出せないし、思い出せないってことはそこまで重要じゃないはず…そこも強く…そう
そう…」

シャンプーの後にリンスも終え、次は体だ。石鹸を手にとり、柔らかいボディタオル
に泡を立てる。

輝夜様の肌、とつても綺麗だ。とてもスベスベで、透き通るように白い。私も肌には
それなりに自信があるが、彼女の肌を見て触るとつい美しいという感想が漏れてしま
う。

「…あんだ、なんか手つきがエロい」

「はい!?そ、そんなことないと思いますよ!」

「あんだそつちの気があるの?…ウサギは性欲が強いつて聞くし、気をつけなきゃね
」

「そ、そんなことしませんよ!」

「イヤーオカサレルー」

私は顔を真っ赤にして否定する。確かに肌に見とれてしまっただけはいたが、それは性的
ではなく羨望や畏敬の眼差し、いわば芸術品を見るのと同じ様な物だ。

はあ、とため息をつき、続行する。次洗う場所は…胸だ。

ボディタオルに泡をつけ、手を前へと回す。

「……フツ」

「今なんで笑ったの？ どうしたの？ 胸が小さいって言いたいの？」

「別にいい、笑ってないでえす」

「アンタ後で死刑ね」

声のトーンがガチだ。殺されはせずとも半殺しにはされそうだ。

とりあえず、さっさと体を洗うのを済ませ、お湯をかけて泡を洗い流した。

「よし、次はアンタの番」

「え？」

「私が直々に洗ってあげるつってんのよ」

　　どうい風風の吹き回しだろうか？ ……ああ、恐らく妹紅さんに勝って機嫌がいいのだろう。輝夜様は私を椅子に座らせ、背後に回る。チュチュつとシャンプーを手に出して、泡を立てて私の髪を洗い始めた。シャカシャカという音と共に、私の頭が泡に包み込まれていく。

「あの一、輝夜様」

「なに？ 気持ちいいの？」

「ちよ、ちよつと荒いです…」

「……………」

ペチンとはたかれた

* * * * *

お風呂から出て、私は牛乳を飲んでいる。輝夜様はパンツとキャミソールだけの姿で寝つ転がっていた。

「あんまりお姫様っぽくない格好ですね」

「はあ？常日頃からあんな格好してられないわよ暑苦しい。アンタの服が羨ましいわ」

「はあ、見た目以外はあんまりお淑やかじゃないですね」

「喧嘩売ってんの？」

「そんな事ないです」

「まあ、良いわ。アレやりなさい」

アレ？アレとはなんなんだろう？

「アレってなんですか？」

「耳かきよ、耳かき。お風呂の後の耳かきは常識でしょ？」

ぐうたらニートなお姫様はどうやら耳かきすら自分でやりたくないらしい。妹紅さんと殺し合い以外に本気で何かをやるって事はないのだろうか？しようがない、私はタンスから耳かきを取り出し、輝夜様の前で正座をした。

「はい、どうぞ」

輝夜様が私の太ももに頭を乗せる。いわゆる膝枕の体勢だ。

「ほうほう、安物の枕ですね〜これは」

「いちいち煽るのやめてくださいよ」

「……はあ、アンタの最近の反応つまらないわ…前みたいに顔真つ赤にして怒ってよ」

「頻度が高すぎるんですよ。会話するたびにからかわれてたら流石に慣れます」

輝夜の耳に耳かきを挿入し、カリカリと耳の中の壁をかいていく。顔を見ると、シャンプーの時みたいに目を細めていてとても心地良さそうだ。もしかして私は他人にご奉仕する才能でもあるのだろうか。

「そこ、そこもつと強く、ああ、良いわ。アンタ色々上手いわね……って、奥すぎない？怖いんだけど」

「蓬萊人ですし大丈夫ですよ」

「ねえそれ再生する前提って事よね!？」

「……ちよ、それ鼓膜ギリギリじゃない!いやあ!触れてる触れてる!怖いからもうすこし浅く!」

恐怖に慄く輝夜様を見るのは少々珍しい。これは普段イジメられてる私のささやかな復讐……まあ、変に驚いたりしない限りは大丈夫……

「何してんの?」

「びい!!」

突然話しかけられ、私はビクツと全身が跳ねた。後ろを見ると、神出鬼没のウ詐欺師、てゐがいた。

「み、耳かきよ。輝夜様がして欲しいって言ったから」

「ほーん、大変なのね。あ、そうそう、この壺買わない? 私の能力で幸運になれるよ! 何とたつたの5万円!」

「高いよ! それに私にそんな胡散臭い話持ちかけても意味なくない? あんたのこと知らない人にやらないとさ」

「あはは、確かにね。ま、それは置いといてさ……姫様は大丈夫なの?」

「あ」

そ、そういえば耳かきの途中……それも鼓膜ギリギリまで……

「か、輝夜様!」

反応がない

「輝夜さ……あつ……」

……死んでる。

05：魔法の森と白黒のアイツ

「餅子ー！いないのー？」

私の名を呼ぶ声で私は目覚めた。おそらくてゐの声だろう。畳の上で熟睡してた私の頬には畳の跡が付いていて赤くなっている。

「なあゝにいい？昼寝で忙しいんだけど？」

「昼寝は忙しくやるもんじゃないよこのぐうたらウサ公。お師匠様が呼んでるよ。早く言ったほうがいいんじゃない？」

永琳様からの呼び出し……ま、まさか実験台？

私は立ち上がり、彼女の元へとむかう。

それにしても、ああ……ついに実験うさぎデビューか……鈴仙と違って玉兎ではない自分の体は耐えられるのだろうか。

そんな考えを頭の中でぐるぐるすると巡らせていると、永琳様の部屋の前へと到着した。

襖を開いて中を覗く。永琳は何やら書類を読んでいたようだが、こちらに気づいて振り向いた。

「遅い」

「す、すみません……あの、用件は……」

「配達よ配達。鈴仙でポジティブになる薬を実験してたら、以前飲ませた薬と相性悪かったみたいで逆に超ネガティブになっちゃったの。そんですぐ首を吊ろうとするようになったから治るまで縛ってんのよ」

何やってるんだこの人達は……

「わかりました。それで、配達先は？」

「霧雨魔理沙って知ってる？」

「き、霧雨魔理沙……一応知ってます……」

こないだ追いかけてきた魔法使い……身包みを剥ぐというのが嘘と分かったものの、逃げたから追ってくるという人物は普通に怖い。

しかし、永琳様には住まわさせて頂いてる身……断ることはできない。

「わかりました……」

「これが大体の地図ね」

* * * * *

魔法の森の上空、地図に記されている霧雨魔理沙の家の大体の位置までやってきた。目を凝らしてよく探してみると、割と遠くの方に何か黒く光るものが見える。

「あれかな……？」

ふと、真下を見ると森の中の木の開けた場所にポツンと家があるのを見つけた。もう一度さつきの方を見ると、すでに何もなかった。

気のせいだろう、と結論づけた私はそこへ向かつて降下していき、玄関の前へと降り立った。

「(ハハ)か…」

茶色い屋根のこじんまりとした二階建て。『魔法使いの家』と聞くとおどろおどろしい古びた洋館を思い浮かべそうだが、そんなことはなく、むしろ庭も多少の手入れを施された清潔感のある家だ。ドアの上に『霧雨魔法店』と書かれた看板が取り付けられている。

私はとりあえずドアをノックしてみた…が、家主がいる気配がしない。

「何してんだ?」

突然話しかけられ、ビクウツ!と体が跳ね上がる。恐る恐る振り返ると、黒白の服に金髪の少女がいた。

彼女もこちらが誰か気づいたようで、『あっ!』とでも良いような表情をしている。

「お前は…」

「お、お久しぶりです…」

「マツコ!!」

「違います！餅子です！」

「デラックスな名前に間違われ、私は大きな声でツツコミを入れた。

「ああ、そうかすまんすまん。で、何しにきたんだ？」

「用件を伝え、配達物を渡す。すると、魔理沙は帽子をゴソゴソと漁りだし、何かを取り出した。

「ほら、代金。これでちようどだろ？」

「な、なんですと……!!」

「どうした？」

「驚愕した。この人、きちんと代金を払っている……絶対に払わないだろうと思っていた私は度肝を抜かれ、目を見開き言葉を失った。

「なんだよそこまで驚くほどの事か？代金くらい払うわよ普通に」

「……意外です」

「意外って失礼だな」

* * * * *

「家の中に入ると彼女はお茶を出してくれた。私は椅子に座ってお茶を啜りながら家の中を見回す。どこかの図書館で見たような本が積み上げられ、並べてある瓶の中には多種多様なキノコが丁寧に保管されていた。また、何らかの実験か何かに使ったのか

色々な器具が散らかっていた。

「外の方が綺麗ですね」

「あつはつはつ、言ってくれるなあ」

私が軽くからかうと魔理沙さんはケラケラと笑いながらお茶を啜った。

思ったより器が大きそうだ。

「ところで何買ったんですか？」

「ん？ああ、これだよこれ」

さっき私が渡した紙袋の中をあさり、こちらに見せて軽くフルフルと揺らす。それは小瓶で、中には淡い碧色の粘性の高い液体がゆらゆらしている。

「なんですかそれ？」

「ああ、私の魔法は森の化け茸がベースになってき、新しい魔法（つばいもの）を開発するにより純度の高いものが必要んだけど、私の技術じゃ超高純度になるまで抽出するには限界があるからお前の所の永琳サマに依頼してるんだ」

「へえ、それにしてもキノコがベースの魔法って珍しいですね」

「私は『魔法を使う人間』って意味での魔法使いだからな、他の『種族としての魔法使い』の奴らの様にゼロからエネルギーを生み出すのはまだまだ難しいのよ。あと、私自身も熱を放つ魔法が苦手ってのもあるけどな」

この人と喋っていると意外な発見が多い。男勝りかと思えば女性らしい所も所々見られるし、才能で蹴散らすタイプに見えて彼女の発言やこの部屋の散らかり方にも実験に次ぐ実験を繰り返したのが感じられ、彼女が努力して今の様になってると言うことがわかる。もしかしたら将来、種族としての魔女へと昇華する日が来るのかもしれない。

「あ、そうだ！お前ウサギだろ？ちよつと手伝つてくれないか？」

「え？まあ、いいですよ。内容次第ですけど」

「なーに、一緒に探し物してくれるだけで良いんだ。竹林のウサギつて確か幸せを分け与えるんだろ？」

「それはてゐだけです。私の能力は竹を司る程度の能力です。あんなにいるウサギがみんながその能力だったら幸福の概念が崩れちゃいますよ」

「なーんだそうなのかあ……チェツ、せつかく『黒く光るキノコ』とやらを探すのに役に立つと思つたんだなあ……」

「黒く光る……？」

あ、それっぽい物ここに来るときに見たような気がします」

「え？」

魔理沙は一瞬きよんとすると、目をキラキラさせ興奮した様に鼻息をフンフンと鳴らした。

「本当か!? な、なあ! そこに案内してくれないか!？」

「い、いいですよ」

「やっぱり幸運のウサギじゃないか、あの憎たらしいチビウサギ追い出してお前が代わりになればいいんじゃないか?」

06：魔理沙のマジックアイテム

私たちは先程光つたと思われる場所へと降り立ち周辺を探索していた。

鬱蒼とした森の木々はぐねぐねと曲がつており、まるでこちらを睨んでいるようにも感じる。木の根本には怪しいキノコが生えていて、淡く発酵しているものもありかなり不気味だ。そして何よりそのキノコらが放出しているであろう孢子、それが何よりも不快だった。

「ケホツ…長居すると体に悪そうですね…」

「そりや悪いさ。だからこうやるんだ」

魔理沙さんは正八角形の物（八卦炉というらしい）を軽く吹かして孢子を吹き飛ばしている。

「便利ですねそれ」

「そう、すごく便利だ。コンロみたいに使ったりもできるし、最大火力だと山の表面を消し飛ばしたりもできるぞ」

「振り幅大きいですね」

「ああ、弾幕ごっこも私はこれを使うんだ。やっぱり弾幕は壺に派手、式に派手、参に派

手って相場が決まってるんだぜ」

「派手な弾幕…憧れます。私はそんなに派手派手なことできる力がないので」
「それならこれをくれてやろう」

魔理沙は帽子の中をゴソゴソと漁り、何かを取り出して餅子に手渡す。

「なんですかこれ？クラッカー？」

「それは魔理沙様特性『弾幕クラッカー（仮名）』だ！普通のクラッカーみたいに使えば熱魔法が飛び出る使い捨てのマジックアイテムだけ。ちなみに名前は募集中」
「結構物騒な物ですね…ありがたく頂いておきます」

「もう2、3個あるがこれ以上は有料だ」

そう言つて魔理沙は帽子をポンポンと叩く。

「というかよく入りますねそんな帽子に」

「この帽子も特別性さ。八卦炉を作ったやつに協力してもらつて物がたくさん入るようにしたんだ。ちよつと大きめの鞆程度でしかないけどな。」

「そつちの方が欲しいです」

「高いよ？」

「…買う気はないですが、いくらですか？」

「買い手が出せる金額の倍だ」

「売る気はないんですね…」

「払えさえすれば売るよ」

とてもユニークな人だ、と餅子は思った。最初はほんとにビビってたが全然悪い人じゃないなというのが感想だ。悪い人じゃないとは思うが性格は良さそうとは感じない、なんと不思議な人だ。

* * * * *

魔理沙の話を聞きながらしばらく森を歩いた。しかし彼女は人間、そして博麗の巫女でもないのによく異変に絡むらしい。

以前に永琳様が起こした（よくわからないが厳密には違うらしい）永夜異変でも彼女は活躍したらしい。こないだは畜生界にも行ったとのこと、妖怪の私よりよっぽど濃い人生を送っている。

「とうかまだつかないのか?」

「うーん、一応この辺のはずなんですけど…」

「しかし、どんなウルトラスーパーエクストリームアルティメットキノコに出会えるのだろうか、すごくわくわくするな。な?」

「いや私は別にキノコに思い入れがあるわけじゃないので特に…」

「はあ…お前にはキノコの良さをとことん教え込まなきゃならんようだな。食べたり魔

法の材料にもなるんだぞ?」

「ウサギはキノコなんてあんまり食べませんし、私は魔法使いでもない上にキノコがなくとも色々とできるので…」

「はあ、これは教育しがいがあるな」

「教育つてキノコつてそんなに重要な」

彼女の話の途中で自分の意思とは別に反射的に耳が立った。ウサギは耳が良い。本来の動物であるウサギは小型草食動物、か弱い被捕食者である。我々は獣に対抗する力を持っていなかった、ならばどうやって守るか?それは敵を事前に察知する事である。その手段として我々の先祖は聴覚を選んだ。周りくどい言回しだが、一言で言えば「敵を察知した」のだ。

上?前?後ろ?横?...ちがう、この音は……

「魔理沙さん!あぶない!下です!!」

私は魔理沙さんに飛びかかって、襲撃者の魔の手から魔理沙さんを守った。その際に襲撃者の一部?が私の肌をかすめる。

「……………」

この感触…この感触を知っている…

「いって…な、なんなんだ?」

「おそらく敵…そして多分目的の物です！」

襲撃したものが地面に引っ込むと、ちよつとした地響きとともに5—6 mはある黒く光る巨大なものがゆっくりと地面から這い出してきた。

「こ、これは…！」

「キノコだ!!」

歓喜の声と驚愕の声の二つが混じり合った同じ言葉が魔法の森に響いた。

07：黒いキノコと黒い魔女

地中から出てきたそれは表面が黒曜石の様な光沢を放ち、分泌液が出てくるのかぬらぬらとしていた。また、そのキノコの周辺の地面でうねうねと動く触手もとても気色が悪い。そしてなにより傘の部分の下にある大きな眼。その大きな眼と視線が重なった瞬間、体の芯から恐怖という感情が溢れ出てくるのがわかる。

「ま、魔理沙さん…や、やばくないですかこいつ…」

しかし、魔理沙は返事をしなかった。チラリと視線を向けると、ブーツとして化けキノコをまるで強い憧れを抱いてるかのような表情で見つめている。

キノコは地面に生えた触手を鞭のようにしならせて魔理沙に攻撃してきた。

「魔理沙さん！魔理沙さん!？」

呼び掛けにも答えずにブーツとしてるため、餅子はその触手から身を挺して庇い、不幸にも顔面にあたる。

「びいいい!!ま、ま、りぎぎあ、ん!!？」

「あ、ああー!」

ハツとした魔理沙は八卦炉を構え、エネルギーを収束させていく。餅子も恐怖を抑え

込み、さきほど貰ったクラツカーをの照準を合わせて紐を引っ張ると、クラツカーから閃光が放たれ、化けキノコを包み込んだ。その瞬間、キイイイイイイという虫に近い様な鳴き声を発し、もがき苦しんでいる。どうやら熱に弱いようだ。

（これなら魔理沙さんの熱魔法で簡単に倒せるはず！）

しかし、いつまで経っても魔理沙は攻撃しない。いつのまにか八卦炉もチャージしていたエネルギーが消えていて、地面に転がっている。

その顔は先ほどと同じように、まるでキノコに吸い寄せられているようだ。

（やっぱりおかしい……何かあるんだ……）

このキノコは明らかに自分よりかなり格下だとわかる。しかし、何故かあのキノコに対する凄まじい恐怖が全然拭えない。特にあの目を見ていると恐怖で心臓が潰れそうになる

（つて、そんな怖がつてる暇じゃない！とりあえず使えるかわかんないけどこれを！）

転がっている八卦炉を拾い上げ、エネルギーを収束させる。

「え、えつと!!!餅符『ツクモスパーク!』」

弾幕ごっこでも無いのでスペカを宣言する必要は無いのだが、魔理沙の真似をしてそう叫んで解き放ったエネルギーは一筋の閃光となり

魔理沙のお尻に直撃した!!

「どああ!? あっちちち!! な、なにするんだ!!」

幸い熱魔法の適性が0なのと、単純に使い方がわからず勢いでぶつ放した為に威力は魔理沙のスカートを少し焦がす程度だった。

「つて私はしてたんだ!?!と、とりあえずかせ!」

餅子から八卦炉を取り上げ、キノコに向かつて一気にぶつ放した。

クラッカーよりも太い閃光がキノコを包み込み、光が消える頃には焼きキノコになっていた。

* * * * *

「で」

全身紫の魔法使いパチュリーはパタンと本を閉じる。

「これを見せにきただけで、今回は本を盗みにきたんじゃないのね?」

「ああ、そうだ。早速教えてくれ」

「はあ……こういう時は盗んだ本を返すのと一緒にやるべきじゃない?……まあ、いいけど」

パチュリーは立ち上がってキノコに触れる。

「ふむ……これは魔法の森に生えてる普通の化けキノコと似てるけど別の珍しい種類ね。ただ、あの森はこの種のキノコが生えすぎてお互い栄養や魔力を奪い合ってるから

ここまで大きくなるのは本当に珍しいわ。

以前小悪魔に調査に行かせたはずだけど見逃してた見たいね。あなた、後でお仕置きよ」

「そ、そんなあ!？」

「そんな事よりパチュリー、こいつと対峙した時……厳密に言うところの眼を見た時に何だかすつごく惹き込まれてき、なんだか恋する乙女みたいな気持ちになつてたんだが……なんか知らないか？」

それを聞いたパチュリーはブフツと吹き出した。

「乙・女・な・気・待・ち・い・い・い? 貴女みたいなガサツな女がぶぎやつ!!」

爆笑しながら机をバンバンと叩いて魔理沙さんを馬鹿にしていたパチュリーさんは、八卦炉から放たれた光線が顔を直撃して悲鳴を上げた。おそらく火力で言えば薪に火をつけられる程度であろう……なんとも恐ろしい……。

「あちち……あ、謝るから……え、えーつと……コホン……このキノコはヒトトリタケと言つて、肉食キノコなのよ。

このキノコは人や獣、時には弱い妖怪などすら栄養にしちゃうの。その分このキノコの中に魔力が生物濃縮されていって、長く生きれば生きるほどその量も増えてゆく。

当然これ程までに魔力を溜め込んだ個体は妖怪化しちゃうわね。んで、当然知能が低

いながらも魔法を使ってくる。その魔法というのが「感情を増幅させる」と言うものよ」

パチュリーさんがなんだか難しい話を始めたせいでウトウトしてしまった。しかし、魔理沙さんはそれを聞くと合点がいったようだ。

「なるほど、だからキノコが好きなのは乙女……パチュリー今笑つ『笑つてないわ』……乙女になって、餅子は動くのがやつとな程の恐怖に駆られたのか」

「そうよ。貴女はともかく、基本的に人間がこのレベルまで育つたヒトトリタケを見た時に感じるのは恐怖心だからね。そして動けないところを捕らえて餌にするのよ」

ひええ……つまり私も捕食対象だったのか……

「なるほどなあ……しかし、ここまで上質なものが手に入るなんてラッキーだぜ！じゃあ、パチュリー私は帰るぜ！」

「待ちなさい」

「ん？なんだ？」

パチュリーは大きな椅子にトスンと座り、手元の紙に何かを書いている。

「そのキノコの70%は頂くわ」

「はあ？なんでだよ」

「貴女が勝手に持っていった魔導書の賃貸料よ。それに、そのキノコの内容を知ったの

も私の本のお陰だし、解説したのも私よ。なんなら今から貴女にこの図書館に踏み入れない魔法をかけてもいいんだけどね」

「ぐ、ぐうううう……よ、40%だ」

「70」

「……50!」

「70」

「55!」

「70」

「ううう!!!60%!これ以上は譲れないぜ!」

「いいわ、交渉成立ね。……それとこれ、領収書よ」

先程。パチュリーさんが何かを書いていた紙。魔理沙さんはそれを乱暴に取り、紙を開いた。

「あつ!!……チツ!」

そう声を上げて、舌打ちして紙を捨てた。ヒラヒラと空中を舞い、私の足元に落ちる。拾い上げて私もそれを読んでも中には『60%』と書いてあった。

「……はい、これで切り分けたわ。残りの40%、持つて帰っていいわ」

「……餅子、帰るぞ」

魔理沙はそう言うと、帽子を深く被りキノコを担いで図書館を出ていった。

「は、は、は」

* * * * *

少し早めに飛びながら魔理沙さんの家を目指す私と魔理沙さん。彼女は深く帽子をかぶっている為、よく表情が見えない。

「えっと……な、なんか悔しいですね」

チラリとコチラを振り向く魔理沙さん、やはり彼女も悔しいのだろうか？……と思つた次の瞬間、魔理沙の口元がニイツ！と横に開いた。

* * * * *

——紅魔館

「はあああ？！このキノコ関連の本が全部ないですってええええ！！」

「は、は、は！！魔理沙さんが来る前は全部あったはずなんですけど……あつ……」

「魔理沙ああああああ！！」

* * * * *

「はっはっは！あんな風にされて私がタダで帰るわけないだろ？これを見な！」

魔理沙が笑いながら帽子の中を見せてくるので覗くと、大量の本が入っていた。

「うわあ……すごいですね」

沢山物が入る帽子にはこれでもかと言う程に魔導書が詰め込まれている。

「パチュリーもまだまだだ。わざわざキノコを担いで帰ってるんだから疑うべきだぜ！ 餅子！ 今からキノコパーティだ！ ウチにある高級キノコを沢山食べさせてやるよ！ あ、これはダメだからな！」

「はい！ それと私もちよつとキノコに興味出てきました！」

「おつ！ それじゃあ今夜は一晚中キノコ談義だ！」

この後、霧雨魔法店では一晚中キノコパーティが続いたのだった。

ちなみに同じ物食べたのに私だけキノコの毒に当たってしまい、永琳様のお世話になる事になった。そして2度とキノコなんて食べないと決心したのであった。

08：闇夜の手

午前2時30分、草木も寝静まり、深い闇に染まった幻想郷は魑魅魍魎が活発に動き出す。

夢の中で空を飛んでいた私、白 餅子は首元に違和感を感じて目を覚ました。違和感の正体は白い腕、それに気づいた時にはもう遅く、がっしりと首に食い込んで来て息ができない。

耳元に残ろからとても憎悪のこもった声がボソリ、ボソリと聞こえてくる。

「カハッ……誰か……助け……」

助けを求めようにも発声器官は腕に締め付けられ、声を出すことすらままならない。

頸動脈が圧迫され、脳への酸素供給が堰き止められる。私の意識は濁ってゆき、無意識の沼の中へと沈んでいった。

* * * * *

午前10時30分、輝夜の1日はいつもこれくらいの時刻から始まる。寝起きという物は目を開くことすら辛い物で、とりあえず体を目覚めさせる準備として抱き枕を抱き締めている腕にぎゅうつと力を入れる。一種のノビである。

ノビによって凝り固まっていた筋肉がほぐされ、血流が良くなって気持ちいい感覚が体を走る。それにより恍惚な表情を浮かべる輝夜とは裏腹に、不服そうな態度を取る者がいた。

「……輝夜様、苦しいです」

よく見ると抱き枕のような物は永遠亭に使えるイナバの1匹、〃白餅子〃であった。

「いい加減私を抱き枕にして寝るのやめてくださいよ〜」

「何言ってるの？アンタはここに仕える兔。そしてアンタは抱きやすく、とても良い抱き心地をしている。私は抱きにくくて抱き心地が悪かったら抱かない。」

では餅子、アンタが抱かれてるのは誰が悪いでしょうか？」

「輝夜さ『アンタよ』」

「はあ、なんと滅茶苦茶な……つてちよ！ど、どこ触ってるんですか!!」

「ふうん、腕や太ももも相当いい肌してるけどここは……更に良いわね？」

大きさは控えめだけどハリがあつて良い形をしてるわ。先の方も色や……」

「わああああ!!?!な、なに冷静に分析してるんですか!!?!ああつ……ちよ、ほんとにやめてくださいよこのスケベ姫!!」

餅子の抵抗も虚しく、体を好きにされることになってしまった。数分後、やっと解放

された餅子とは肩で息をしていた。

「ゼエ……ゼエ……もう……お嫁にいきません……」

「大丈夫、私がおらつてあげるわよ。勿論、難題を出すけどね

……そうねえ、閻魔の悔悟の棒でもぶんどつてきなさい」

「地獄行き確定じゃないですか!!蓬萊人で死とは無縁だからって文字通りの無理難題を押し付けないでくださいよお!!」

「死とは無縁で会えないから取りに行かせるんでしょ?」

「はあ……大体ですね?輝夜様が毎日毎日私を抱き枕にするもんだから私は寝不足なんですよ?」

「あら、私ってそんなに寝相悪いのかしら?」

「どんな夢を見られてるのは知りませんが、妹紅さんの名前をブツブツ呟きながら気絶するまで私の首を絞めたりとほんと酷いんですからね!!」

「あら、絞め落とされたら眠れるじゃない」

「はあ!?!頭おかしいんですか!?!」

「というか、抱きやすさならてもでも良いじゃないですか!私より少し小さい程度です
し」

「あいつ普段どこにいるかわからないじゃない。今朝もなんか良い物見つけたって

しやぎながら竹林に消えて行ったし。

……だいたい、私はアンタ抜きじゃねれない体になっちゃったのよ？とりあえず抱き枕係を辞めたいのなら代わりになるもの探してきなさい」

* * * * *

「はあ……最近、何回“めちやくちや”や“理不尽”なんて言葉使ったかももう覚えてないなあ」

本当の本当に滅茶苦茶で理不尽なのである。同じ月の民の永琳様は……いや、あの人もなかなかマッドだ。月の民は皆あんな風なのだろうか？

「……いつか難題を引き受けなくとも闇魔様の所に行くことになりそうだ……」

そのようにため息をつきながら抱き枕の代わりを探すために竹林をトボトボと歩いていると、ガサアツ！と音が鳴った瞬間に私の体が空中に浮かび上がり、地面が真上に反転した。いや、反転したのは私だろう。

「て、てゐいいいい!!」

輝夜様が言つてた大はしやぎをしたのは、新しい罫を思いついたとかそんなもんだっただのだろう。それにしても今までハマりまくつてゐの罫を熟知してるはずなのに久しぶりにハマつてしまった。腕を上げたなあいつめ。

「もお!!ほんとかくだらな……つてこれギチギチで取れないじゃないか!!!誰かああ!!!」

抱き枕の代わりになるものを見つけにいかなければならないのにこんなもので時間を食う余裕はない。誰かいないかと声をあげている所に何かを見つけた。

「あれは……」

緑に塗れた竹林の中で一際目立つ紅い服。この光景を形容するならば意味は違うが紅一点という言葉が適当だろう。

「妹紅さああん!!」

私の声に気付いたようで、こちらに向かつて歩いてきた。

「君は……クソおんな輝夜の所の……ムチ子ちゃん?」

「餅子です!」

自分とは正反対とも言える名前を言われ、即座に否定する。いつも変な名前に間違われるが、改名した方がいいのだろうか?かなり覚えやすい名前だと思っただが……。

「そうだったそうだった、ムチムチじゃなくてモチモチの餅子ちゃんだったね」

そういうと妹紅さんはニコリと微笑むと、私のほっぺを軽くつまんでムニムニと揉み、頭を優しく撫でた。

なんだこのイケメンは?いつその事、妹紅さんと輝夜様で交代してくれないかと思っ

た。
「……ってそんな事よりこれ外すの手伝ってくれませんか!」

「お？ああ、わかったよ」

　　少女解放中

「これでよし……つと！」

……それにしても元気なさそうだけどころかしたのかい？……表情から察するにまた輝夜に振り回されてる様に見える」

「そうなんです……実は……」

　　少女説明中

「うわあ……キミも大変だね」

「大変です……いつか死んじやいそうです……」

「はっはっはっ、死なないように寝てる時に腹を掻っ捌いて胆を食べればいいじゃないか。一緒に寝てるんだろう？」

「……妹紅さんもなんですか？」

「何が？」

なるほど、いかれてるのは月の民とかじゃなくて蓬莱人の方だったのか。

「いえ、何でもありません」

「ふーん。あ！そうそう、抱き枕なら力になってくれそうな奴が1人いるよ」

「本当ですか!？」

「ああ、本当だ。そいつは魔法の森に住んでる奴でね」

09：依頼はプロに

魔法の森、相変わらず薄暗く魔力を含んだキノコの胞子だらけの所である。ここは魔理沙さんが住んでる場所で、何かと縁があるのかもしれない。

魔理沙さんの家は木が開けた場所にあり、上から向かうことができる。しかし、妹紅さんが教えてくれた人の家は木々に囲まれた中にあるとの事で、仕方なく歩いていました。しばらく歩いてみると、薄暗い中に洋風の家がポツンと建っていた。灯りがついているのを見ると、恐らく住人は在宅中のようだ。

さつそく戸をコン、コン、コンとノックしてみる。

「……………」

返事はなく、誰も出ない。どうしようかと考えているとガチャリと扉が開いた。

扉から覗く顔は私以上に白く、ウェーブの掛かった艶のある髪、美しい青い眼も相まって一瞬、眼にサファイアを埋め込んだフランス人形の様に見えた。

彼女の名はアリス、アリス・マーガトロイド、〃七色の人形使い〃と呼ばれている。

「えっと……………こんにちは……………」

「……………迷ったの？とりあえず、入っていいわよ」

* * * * *

家の中は小洒落た雰囲気、テーブル、キッチン、作業台、全てがまさに“洋風”であつた。紅茶を一杯淹れて貰つたのでチビチビと飲んで、肝心の彼女はテーブルの対面に座つたまま読書をしている。

「……………」

普段静かな所は好きだが、こんなに静寂が辛いことは初めてだ。

「……………何の様？」

不意に要件を聞かれてついビクツとしてしまった。本当にいきなりだ。とりあえず輝夜様の件について説明することにした。

「あ、あのかくかくしかじかで……………」

「なるほどねえ……………まあ、つまりは抱き枕を作れつて事ね？」

「はい、とりあえず私くらいのサイズがちょうど良いとの事なので、その辺も考慮していただけたら……………」

「わかつたわ。とりあえずこちらに来て、身長と体型体重を測るから」

「体重ですか？」

「抱き枕つて結構重さが大事なのよ」

「わかりました……………」

あまり乗り気じゃ無いが、素直に従って色々と測る事にした。

その途中、アリスが『あら、あなたつて身長と体型の割には体重が……』と口にした時に私が発したプレッシャーは鬼さえも凌ぐほどだったという

* * * * *

「……はい、採寸完了。早速作るから適当に時間潰してて」

そういうと、彼女作業台へと向かった。

(……はあ、これでとりあえず寝不足は解消されるなあ)

やっと安寧の日々が戻ってくる、そう思うだけで気分が弾む。ああ、さらば苦行の日々よ……

「あらっ？」

声の主（まあアリスさんと私しかいないのだが）の方へ振り向くと、彼女は腕を組んで首を傾げていた。

「どうしたんですか？」

「いや、それが……」

「裁縫道具が……ない」